

〈司会・角之倉宏彰より〉

9月の講座は、埼玉県の中学校教員である岩田彦太郎先生に講師をお願いして、対面とオンラインの併用で実施しました。コロナ前とコロナ後の3年間の中で、どのように生徒と過ごし、学習活動を行ってきたのか、年間を通しての大きな行事や学習活動を通して、実践を報告していただきました。

コロナが流行し始めた時、私は学校に関わる仕事を始め2年が過ぎた時でした。特別支援学校では、まだよく分かってないウイルスであるため、児童生徒がコロナに感染した場合、大変なことになるということで休校に近い状態になり、学習活動を行える状態ではなかったことが思い出されます。

そのような中で、どのように生徒たちに学びを提供するかを学年の先生方と話し合いながら進めてこられた岩田さんの実践は、どんな状況でも工夫次第で深い学びができることを教えてくれたと思います。また、生徒たちが知識を生かしてそれぞれが創意工夫して能動的に学習に取り組んでいることが資料からも読み取ることができ、教員が行う学習活動次第で生徒の考える力も育っていくように思いました。そして、その学びの方法を教員が教えたり生徒自身が発見したりして成長しいける場面を作ることが教員という仕事の1つであるのかなと岩田さんの実践を聞いて思いました。

今回、お忙しい中、講師を引き受けていただいた岩田先生、貴重な実践報告をしていただき、改めてありがとうございました。

〈参加者の感想（抜粋）〉

*岩田学年の素晴らしさを、以下のような点で感じました。

- ① 今職員室では、生徒の話をするともなく、黙々とパソコンに向かって仕事をしているという話を聞きますが、岩田学年の先生たちは、生徒のことを色々話せる集団であること。
- ② 生徒の現状をしっかりと客観的に分析して、これからの方針を決めていること。
- ③ 総合的な学習を中心に、学年の教師集団全員で、それぞれの個性を生かして、アイデアを出し合っていること。
- ④ 被爆者の久保山さんへの質問を、学級委員会で話し合っただけでなく、生徒の自主性を伸ばす努力を続けていたこと。

また、質問させてもらってわかりましたが、岩田さんが、障がいのある子どもたちも一緒に活動に取り組もうとしていることは、さすがだと思いました。

最後に、吹奏楽部の顧問になってチューバ？を生徒たちに教わって、ワクワクしている岩田さん、本当に素敵な先生だなと思いました。 (元特別支援学校教員)

*子どもの実態を学年団の教員と共有しながら、トップダウンではなく横並びになって進んでいく様子が温かくもあり力強さもありで、大変勉強になりました。

小学校と中学校が、岩田先生と同じような子どもの成長像を共有すれば、子どもは主体的に学び、生きていくことができるのになあ、と現状に対して残念な気持ちになりました。

私は小学校の教員として、子どもの声、主体性を守るために、子どもを否定しない言説を広げていきたいと思います。ありがとうございました。（小学校教員）

* コロナ禍の中学校の学年教員集団の指導と中学生の様子がよくわかりました。

制限のある中で生徒たちに「生きた学び」を保障すべく、総合的学習の時間・行事を充実させることを学年団で追求されていたこと、このことに敬意を表します。

特に中2（コロナ一年目）の10月、南中祭の代わりに総合学習「SDG 'S」の調べ学習を実施⇒班発表⇒クラス発表会⇒学年発表会を行ったあと、生徒たちの姿を見て学年団で現状分析し、やってよかったけれども「何かが足りない」と総括したことは、大事なポイントだったと思います。自分たちで学んだことを表現する場を設定する機会が足りない。生徒たちはそういう場を求めているはずという分析から、3学期末に「SDG 'S」をダンス、ナレーション、アートの3つのジャンルから一つを選び、体育館に自己表現する場を設定。学年全体で一緒に学ぶ機会をつくった。そして生徒たちに「大きな達成感をもたらした」このことが中3の積極的取り組みにつながっていったかと思います。おそらく全国各地の中学校で、受け身の学びを保障するのがやっと、各生徒の個人的な努力に依拠した学習が展開していたのではないのでしょうか。こういう指導をしていた全国各地の中学校といったい何が違うのでしょうか。

岩田さんたちの学年教員集団が中1の時から、学年団として生徒の現状分析をよくし、その上で学年の目標をたて、生徒にこうあってほしいという願いをもち、学年指導にあたってきたことが大きいと思います。コロナ禍の中、ある県のある中学校でこのような実践があったこと、私はとても頼もしく思いました。（特別支援学校教員）

* 「小学校時代に『先生に叱られるかどうか』で自分の行動を決定していた」という部分は、小学校教員として反省しなければいけない部分であると感じた。多忙化や時間のなさを言い訳にして、考えさせる時間を取れていないことが、中学校での荒れの要因となることを再認識した。そして、「〇〇小スタンダード」、「無言清掃」や「無言給食」は、教員になる前から全く意味がないと思っていた。「子どもが納得せずに自己決定しているからあつという間に崩れていく」という話を聞き、改めて私の指導がどれだけ子どもが納得しているのか考えなくてはならない課題であると認識させられた。

社会科だけでなく、総合的な学習の時間や学校行事を通じて「表現活動」を行うことは、コロナ禍で浮き彫りとなった自己肯定感や充足感の課題を乗り越える1つの手段だと感じた。最近、働き方改革等でこのような活動が削減されてしまう傾向にあるが、子どもの教育活動に関わるものは削減してはいけないと考えた。（小学校教員）

* 実践レポートを聞き、岩田さんを含む学年の取り組みの良さを体感することができました。学年が一丸となって子どもたちを丁寧に読み解き、行事を通して子どもたちをのびのびと成長する瞬間を大切にしているなと思いました。また、社会科の教員として実際にリアルな事例を取り上げ、子どもたちに「社会人」になるための知恵を授け、必要な力を伸ばしている様子を知ることができ、とても感動しました。今、私は中3の公民を教えており、先日、日本国憲法の「国民主権」の

授業をしました。社会科の授業の中でも実践できることがあるかと思い、明日の授業からでも取り組んでいきたいと思います。
(特別支援学校教員)

*ブレイクアウトルームでは教育現場の第一線で働かれていた方とお話しすることができ、大変刺激となりました。また、岩田様の実践のお話なのですが、大学での教科教育法(授業指導案や指導のエッセンスを学ぶ講義)では、授業特質上、生徒観や学校行事との連関などが無い話が多かったため、本講座のような学校行事などと連関した授業実践はとても勉強になりました。

生徒のワークシートも拝見させていただいたのですが、中学生の子どもたちがB4版にびっしりとレポートを書いていることにまず驚きました。教科書で見える話だけでなく、自分に近い人が目の前で伝えてくれる話だからこそ、生徒も「知らなければいけない」と自主性を持って、自分ごととして取り組んでいけるのではないかと思います。

最後になりますが、講義内で岩田様が「先生の得意を活かして」といった話をされていたことも印象に残りました。私は大学で農学(特に過疎農村地域の地域おこし)を専攻しており、北海道中を駆け巡って農業関係者の方々や地域おこし協力隊の方々との関わりを持たせていただいております。「チーム学校」が求められる今だからこそ、「農業に強い教員」として食育にも力を入れていければなと思っています。貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。(学生 B.Y.)

*昨日は途中退席となってしまいましたが、岩田さんのお話はとっても面白かったです！コロナ禍での学校内での対応や子どもたちの様子は、共感できる場面が多々あり、あのコロナが広がり始めた頃を思い出しました。一番印象に残ったことは、岩田さんを中心とした学年の先生たちのやりとりが、子どもを中心に据えて議論をしていることです。

コロナ禍で色々な場面で対応などが大変だけれども、子どもたちの様子や実態をもとにして色々なことに取り組まれていることが印象に残りました。学校って、本来はこういう風に子どもを中心に議論をすべきだよなあ。。。と思いました。いまは、どの学校でもそれがなかなか難しいのではないかと思います。(中学校教員)

*先日はありがとうございました。貴重な機会にお誘いいただき良かったです。大変勉強になりました。ブレイクアウトルーム後の発表は緊張していたのですが、何とか話せて良かったです。

コロナ禍による学校教育への影響は色々あったと思いますが、人との関わりが少なくなってしまったというのは本当に深刻なことだと痛感しております。今回、少しでも生徒同士が関わる機会や自分の思いを発信する機会をつくろうと奮起された先生のお話を聞き、学校のあり方を見つめなおすことができたと思います。このような機会を設けていただきありがとうございました。

(学生 G.K.)

*コロナ禍の学校運営や子どもたちの学びの確保をどうしていくかは、どの学校職員も本当に悩ましい問題であったのではないかと岩田さんの実践を、自分事のように感じながら聞かせていただきました。無言で清掃をすることについても、『教師に怒られないようにするため』では、主体性

が育たないもので、こうした教師が一方的に何でも決めてしまうのは、良くないことだなと感じました。社会で問題視されているブラック校則も、学校の良くない体質の象徴だなと思いました。一方で私の勤務校のように特別支援学校においては、生徒たちに全てを委ねるのも中々難しいところはあるので、必要に応じて教師が見守ったり、時に生徒たちへの助言はしていく必要があるかなとも思いました。

平和学習についても、当校の2年生徒はこれから修学旅行を控えており、まさに広島や長崎で何が、どうして、なぜ起こったのかを調べているため、戦争証言者の方からの講話やナレーション発表・造形作品の紹介など、今回の実践は、大変貴重なものでした。是非参考にさせていただきたいと思います。ありがとうございました。
(特別支援学校教員)

*今回は社会科という教科に限らず、学校教育の実態について幅広くお話が聞けました。私は学生で、まだ教育現場に出ていません。そのため、現在の教育現場の具体的な状況は未知であり、勉強になりました。ブレイクアウトルームでは、今回の講座のテーマに限らず、学校教育に関する様々な話を聞くことができ、よかったです。
(学生)

*現在私が勤めている中学校の、中学1年生が、まさに「落ち着かない」様子です。コロナと関係があると言われると違うような気がしますが、授業中にトイレに行く生徒が、2、3年生にくらべて本当に多いです。途中で保健室に行く子もかなりの数います。自己肯定感は低く、「できない」「やりたくない」「めんどくさい」が口癖です。寝てしまう子も多く、中には班活動をしていても寝る子がいたりします。これらも他学年では見られません。

小学校では生活面を厳しく指導されていた様子が伺えます。例えば、給食のお代わりにに関して不思議な質問をされることがありました。魚の皮を残したらおかわりしちゃいけないですか、などです。先生に叱られるかどうか判断基準となっていることも、彼らと関わっていると分かります。

ブレイクアウトルームでは、小学校が本当に忙しいということ伺い、中学校も人手が足りないということ、そして、小中の連携がもっとあるといいなというお話をしました。

今回授業づくり講座に参加して、授業中に「できた」「わかった」「考えが深まった」という実感を得られるような授業になっているかどうか、自分の授業を今一度問い直す良い機会でした。あらゆる手段を通じて生徒の自己肯定感を高めることは、日常の生活からも、日ごろの授業からも意識して行っていきたいです。

「単に調べ知るだけでは不十分」という言葉は、常に胸に留めておきたいと思いました。相互に伝えあっているか、意見を言い合って考えたことや感じたことを表現できているか、私にとっての課題がより具体的に見えてくるようでした。

戦争体験者の聞き取りは、今後の教員生活のなかでやりたいことのひとつです。アートやナレーションでの表現活動を提示していただきましたが、表現方法の工夫の必要性も強く感じました。私には引き出しがまだまだ足りないので、様々な表現方法を探していきたいです。

一方で、働き始めてから「生徒の実態に応じた」教育内容と教育活動についてよく考えるようになりました。学年によって実態の差、クラス内での差がとても大きいです。授業づくりの難しさを、特に1年生で感じています。

今回報告にあったような授業を、この先私もやりたいと思うとともに、私自身勉強し続けていくことが必要だと強く感じました。先輩先生方の授業実践を励みに、気合を入れ直した授業づくり講座でした。今後とも、精進します。次も参加したく思いますので、よろしくお願いいたします。

追伸、先生って本当に忙しいですね。尊敬するばかりです。 (中学校教員)

*今回、授業づくり講座に参加し、自分自身コロナ下には高校2年～3年生の学生であり、当時のことを思い出しながら、聞いておりましたが、特に、コロナ下で開かれた南中祭について興味深く感じました。臨時休校や分散登校、イベントごとの中止を経験し、自分を表現する場がなかった中、こうした表現活動は生徒に特別なやりがいを与えられており、高校三年の時、ソーシャルディスタンスを取るため、グループワーク等の集団行動の自粛や球技大会などの本来計画されてきたイベントが中止され、クラスメイトとのつながりや結束が薄かった自分の経験からも行事やイベント活動の場を設けることは、生徒にとっては学校というコミュニティをより有意義に過ごすため、生徒の成長という観点からも必要なものであると感じました。また、今まで教師側の立場で学校現場を知ることが少なかったため、教師側がどのように生徒のことを考え、学校づくりを心掛けているのか少しでも知ることが出来、良い経験になりました。

今回学んだことを自分の教職課程の場でも活かしていきたいと考えています。 (学生)

〈講師の岩田彦太郎先生より〉

9月授業づくり講座について

この3年間の実践については、折に触れていろいろなところで報告したり文章にまとめたりしてきましたが、今回のようにまとまった時間をいただいて報告するのは初めてでした。私としても、総まとめのような場にすることができました。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。報告を終えて改めてこの3年間を振り返った時、私の中で最も重要だと感じるのは、同僚の先生方とともに悩み、率直に意見を交わし合いながら手探りで進んできたその過程であったように思います。コロナ下という、全く先が見通せない状況だったからこそ、そのことが際立ったのだと思いますが、考えてみれば、教育活動というものは本来そういうものなのだと思います。子どもは、一人一人の子どもも、学年や学級などの集団も、日々刻々と変化し続けています。その変化を常の複数の目で捉えながらそれを交わし合い、少し先の未来やかなり先の未来を展望しながら、それこそ手探りしながら具体的な教育活動をつくり出していくことが、教師の仕事なのではないかと思います。当日もそのように発言しましたが、「大変だった」のは事実ですが、総じて楽しくはあったのです。その楽しさは、教師が本来果たすべき役割を集団で組み立てて行っているという実感があったということなのではないかと思います。今回の報告を通じて、今後も同僚の先生方との対話を基本に教育活動に当たっていききたいと改めて実感しました。ありがとうございました。